

「秋田大学学生海外派遣支援事業」 帰国報告書

所属； 工学資源学部生命科学科 2 年次

氏名； 中村 隆太郎

派遣先大学名； ボツワナ大学 (ボツワナ共和国)

在籍身分； 交換留学生

派遣期間； 2012 年 8 月—2013 年 2 月

渡航日； 14/8/2012

帰国日； 3/2/2013

授業履修状況；

- Language Instruction 1

期間； 8-12 月

週当たりの講義時間； 45min×3

- Genetics

期間 8-12 月

週当たりの講義時間； 座学 45min×2、実験 4hr×1

- Cell Biology

期間 8-12 月

週当たりの講義時間； 座学 45min×2、 実験 4hr×1



画像 1, 寮の裏

・研究、学習概要及び今後の勉強計画

ボツワナ大学では主に生物学、セツワナ(ボツワナの母国語)を履修していた。授業は、座学が1コマあたり45分×週2コマであった。それにプラスして実験が週1回4時間ほどあり、これは毎週レポートの提出があった。また、セツワナ語の授業は、必修ではなかった。中には、教授さんが遅れてくるために、実質30分ほどしか授業が行われないものもあった。内容自体もすでに学習済みのものが多かったように思う。自分は、期末テスト等があったため、履修期間内に現地につくことができなかつたために、授業を見てから選ぶことができなかつた。できる限り履修科目は自分で見てから決めた方が望ましいと思う。また、留学中に寮のこと、成績等に関することを現地の先生方に聞くと、言うことがころころ変わったり、人によって全く違うことを言うし、挙句の果てに開き直すこともあったので、生活に関わることは、現地の留学担当の生徒や、アイセックの学生に聞くのが好ましいし、成績関連のことであれば、必ず秋田大学を通したほうが良いと感じた。

専門の授業は、パワーポイントを使って行われるものが多かった。語学の授業はディベート方式で少人数で行われた。どちらの授業も気軽に質問できるし、逆に1つ1つ質問されることも多かつた。専門の授業は留学生が自分だけだったこともあり、毎回のように質問されてタジタジしたものだった・・・。

今回の留学を通して、勉学面で感じた課題としてはまず語学力に関するものであった。海外を旅行することを考えると不自由はしなかつた。しかし、現地で仕事をする。専門的なことに関わることを考えると、今以上に言葉を使えるようにならないといけないと実感した。そのためにまず、これからもTOEICやTOEFLの勉強はもちろんのこと、専門分野に関する英語にももっともっと触れていきたいと思う。今までは、読んで理解することを目的として英語の勉強を行ってきたが、これからは、ディスカッションができるようになることを目標として勉強を進めていこうと思う。そのために、専門分野に関する国際会議などにできる限り参加し、英語での言い回しに触れたり、ディスカッションを行っているTV番組など、可能な限り見ていきたいと思う。

また、自分の知識が浅いことも実感した。概要はつかめているものの、詳細を説明できないものが多かつた。これについては、講義をしっかりと聞き、理解を深めていきたいと思う。

・生活面について

ボツワナ大学の構内には、通称“411”と呼ばれるバー(ビリヤード台もある)や、深夜までナイターのついているバスケットコート、フットサルコート、その他各種のコートがあった。また、秋田大学と同様に、学食(構内に2か所)や、軽食を販売している場所、スーパー、本屋もあった。学食や、コートに行けば、誰かしらが声をかけてくれたので、たくさんの現地の生徒と交流を持つことができた。多くの生徒は、歌って踊ってお酒を飲むことが好きで、部屋にはスピーカーがある生徒が多かった。現地では、小学校から英語で授業が行われるらしく、大学にいたほとんどの人が当たり前のように英語もセツワナ語も話せていた。なので、最初はみんな気を使って英語を使ってくれるものの、ヒートアップしてくるとついついセツワナ語が出てしまうみたいで、何を言っているのかまったくわからないこともあった。

ボツワナ滞在中は学生寮に住んでいたが、キッチンがなかったため、食事は基本的に学食でとっていた。食事の1例は添付した。ボツワナの主食はパパと呼ばれる、ケニアではウガリと呼ばれているものであったが、ウガリから味を取り去ったような味であった。・・・これだけは最後まで好きになれなかった。学食のメニューはある程度固定はされているものの、日によって味が違ったり、それなりにバラエティーがあり、何より米(タイ米ではあるが)があったので、楽しい食生活を送ることができた。日本でいう定食のようなものが150円ほどであった。いまでも、学食のチキン、ビーフはものすごく恋しくなる時があるほど、お肉が格別においしかった。現地の人は多くがパパを食べていた。行くまでは、手で食べることを想像していたが、スプーンやフォークで食べるこ



画像2, chicken feet 120円程・・・あまり人気なし



画像3, ニースミートと Fat CAKE

画像2のメニューは人気があった。Fat Cakeは日本でいう揚げパンのようなもの。これで110円程。

*当時\$1=80円程であった。

学外には、歩いて 20 分ほどの距離にショッピングモールが 2 つあり、その片方には映画館も入っていた(1 本 300 円程で観られた)。日用品の買い出しは主にここで行っていた。週末などは、みんなでショッピングモールに行き、ご飯を食べたりもした。自分には衝撃的だったのだが、ピザのデリバリーが人気であった。1 枚当たり 600 円程で、日本よりも、安く、さらにボリュームもかつおいしいという文句のつけようのないものであった。これは、現地の人もよく利用していた。

学外に限ったことではないが、アクシデントが多いのはやはり学外であった。明るいうちに被害にあった話は一度も聞かなかったが、夜に被害にあった話はよく聞いた。殴打され所持品を盗まれたり、後ろから首を絞められたり。学内でも留学生に限ったことなく、みんな柵を、“くさり”と“南京錠”でロックするのは当たり前のことであった。

・この留学を通してー

初めに、この留学では留学期間が短くなってしまったり、年明けに連絡がつかずにご迷惑をおかけしてしまったりと、いろいろとご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。しかし、今回の留学では、自分が思い描いていた“発展途上国と言われている場所”、とりわけ“アフリカ”の一部の国と地域について、想像と現実のギャップを感じ、気付かされた貴重な期間であったことには変わりなく、これからの目標がより明確になりました。自分の中で、発展途上国での仕事というものは先進国から資金を集めて慈善事業を行うというか、無償で、利益を期待せずにボランティアのような形でやるものしか思い描けずにいました。留学中は比較的休みが多かったため、複数の場所に行くことができ、自分の訪れた国、地域では、ボランティアとしてではなく、ビジネスとして参入している企業が多い町や、インフラが整っている場所も多くありました。中でもボツワナは、地方に行っても道路が整備されており、電気もおとっているし、首都ハボロネに関しては水道水が飲めるほどしっかりと整備されていました。(地域による格差があることも確かですが。)

ボツワナに関して、そこまで詳しく知っているわけではありませんが、主にダイヤモンド産業で豊かになっているボツワナでは、そのビジネスによる利潤がインフラに回っていて、またそれによって教育も、医療も発展してきているように感じました。格差があることを除いて話せば、ビジネスをすることで発展途上国と関わっていくこともできるのだと実感することができました。

じぶんはもともと発展途上国で仕事をしたいと思っていたので、こういった、想像と現実の間にギャップがあったことに気付けたことや、ボランティア以外の関わり方が、

初めて現実的に感じる事ができたので、とても有意義なものになりました。そしてなにより、違う環境で生活している同年代の人たちと一緒にくだらないことを話したり、将来のことを語ったことがとてもいい経験になったと思っています。

ありがとうございました。



画像 4, 寮



画像 5, パ二(芋虫の塩漬け)、美味でした。